

四時半献奏者一同打揃って神社内殿に参集し、神官の修祓を受け玉串奏典参拝の後五時開演。君ケ代、前田由香、湖水渡り、中谷瀧扇、弁財天、伴仲ますえ、たか子、よし子、三少女、秋風故郷の山、岡本旭村(以上賛助出演)、川中島、山岡旭清、城山、植村寅水、大楠公一、田中島、富樫の涙、植村寅水、那須与市、荒木旭媛、関ヶ原、矢吹旭美津、本能寺、坂本一峰、白虎隊、木下皇水、常陸丸、梅原旭、濃雲、戸田旭公、桶狭間、平井春嶺。以上献奏のあと神社提供の神酒で本年度の行事を無事終って乾盃し九時半自出たぐ散会した。

一水会神戸支部。蓮水会のゆかた会

七月二十五日(日)屋西宮市松園町の会員楊淑水氏宅で開催。松野紫雲顧問、蓮水会長以下十数氏出席の外京阪神から来賓五氏列席。酷暑を克服して熱演が続けられ夕刻楊氏夫人、母堂、令嬢心尽しの接待を受けて和気霽々裡に会食、芸談などで楽しい一日を送った。詩吟十題、蓮水会員、青葉の笛、高原文字、静、田中緋沙子、木の宮蓮尚、湖水乗切、村上吟湧、堀田蓮弘、弁内侍、川上穂水、城山、吉田蓮葉、重衡、田村魁水、詩吟数題、蓮水会員、本能寺、楊淑水、巴の前、山崎蘭水、三浦蓮水、(以下来賓)白虎隊、大阪金奇崎、水、巖流島、神戸田中敷水、相生、京都馬場鴨水、松の廊下、大阪中山鳳水、瀧陽江、大阪小川吟水。このあと松野紫雲作詞「楊貴妃」の名人演奏のテープ録音を鑑賞、一同感激の内に散会した。

京都琵琶協会八月定期茶話会

三十三度五分という酷暑を征服しての集りも琵琶が好きなればこそで立秋とは名ばかり、カンカン照りの八月八日(日)昼会員田中鵬水氏宅の冷房がよく利いた座敷で開催。田中氏の「高松城」を序演に続き数氏の研究演奏で暑氣払いをしたあと、例年の秋季演奏会を今年は義士演奏会に繰り延べることとし十二月十二日(日)安井金比羅会館で開催に協議決定、曲目の選定などをして夕食時には田中氏提供の冷ビールで涼をとるながら去る七月二十三日の祇園祭八坂神社奉納会の録音テープを聴いたり胸襟を開いて雑談を交すなど楽しい半日を送った。(出席者)伊吹正陽、馬場鴨水、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭媛、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、荒木旭媛、水内熾水、平井春嶺、植村寅水、来賓遠師旭富氏

京都霊山護国神社琵琶献奏

八月十六日(月)夕六時京絃社協賛(次号詳報) 藤巻旭鴻演奏会 八月二十九日(日)屋東京千代田区農協ホール 一門の外各流派名手数氏協賛出演(次号詳報)

(予告)

○京都琵琶協会九月定期茶話会 九月五日(日)屋一時、会員平井春嶺氏宅。  
○柴田旭堂の故人追悼公演 九月五日(日)屋神戸市生田区下山手通四丁目兵庫県民会館九階ホール、平家物語を聴く会後援。小田、中村、河野、小林、井上五故人の慰霊追悼会。旭堂会員多数の外神戸、東大阪、北大阪、相生各地旭堂々員協賛出演、外に盲僧琵琶、日舞、詩吟、詩舞等多彩なプログラムが組まれている。  
○晴風会演奏会 九月二十六日(日)夕六時東京杉並区高円寺会館。主催浅野晴風氏

暑い苦しい夏が終つてようやく待望の初秋九月を迎えることとなった。暑さに弱い筆者など毎年のことながらどうしてこの夏を過ごそうかと取り越し苦労をするがどうやら今夏も夏もせず乗越えられそうである。未だ暫くは残暑という厄介な奴に悩まされようがそれも時々の問題でやがて爽やかな秋が来よう。春夏秋冬四季を通じて春は花、秋は紅葉と歌われるが筆者は華やかな春よりもしつとりと落付いた秋が好きである。夏枯れの琵琶界もそろそろ活動期に入り筑前旭会、同橋会、一水会の全国大会も既に決定しているし各地での演奏会なども日を追って発表されよう、喜ばしい事である。京絃七月号の本欄で、年輩者の多い現在の琵琶人は口先きばかり達者で琵琶の発展に資する実行が伴わない云々と少々惜まれ口をたいたところ、某氏から嬉しいお叱りの手紙を頂戴した。曰く「各流派を通じて若いお弟子さんの養成に力を注いでいる年輩の男女のお師匠さんが各地で活躍している。あなたも相当の御年輩で錦心流の古参と聞いているがお弟子の育成をしては如何な様子がない、まづ自ら範を垂れては如何かと。誠に耳の痛いお手紙で一言の弁解も出来ないが、あれはただ一般論に言及したままで世の古い琵琶人の奮起を促すつもりで書いたもの、某氏のように云って下さるお方が外にも大勢居られるならば琵琶界も一朝一夕に棄たれることもあるまいと心強い感に打たれた。(京絃社電話の局番85)が73に変わりました。

昭和五十一年九月一日発行(非売品) 編集者 植村寅水 発行所 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二六七号 京絃社

薩摩琵琶とその周辺(七)

刀剣に対する武士の愛着―鉄砲は足輕の持ちも― 林羅山の警告―旧式銃に苦しんだ乃木連隊長

東京 坂本 錦 道



鉄の本質を極限に芸術化したものは日本刀である。秋霜烈々、幽玄を秘め明皎々たる白味と鈍(にえ)、その中に無気味な黒味。武士はこれを靈物として尊崇の信仰をもって愛した。さらに神社仏閣の宝物として尊敬の念は日本人の心の底流にある一つの思想でもあった。

ところで新しく伝来した鉄砲という恐るべき兵器に対し武士は驚きもしたが、然し全く身も心も忘れてこの外来兵器に執着するかといえはさにあらず、寧ろ冷やかに、否最も嫌悪すべき眼をもつて眺めていた。これは日本武士の刀に対する父祖伝来の思想的価値と、これを鍛冶する刀匠も亦齋戒沐浴、一切の邪念を払って打ち出される、この靈物的その価値を通して行方修練は不屈の闘魂を磨き、人格の陶冶の具とし、武士道の根元として心奥に潜在する。そうした意識のもとにこの外来兵器になじめない理由があった。

前号に於て触れた幕府の儒官林羅山の宣伝は、武士の間に深く肯定すべき論拠あるものとして武士に受け容れられた。家康ほどの者が後來この恐るべき兵器の応用如何は、幕府存立に響く危機感を充分持っていたものと思われる。

慶応四年、さしも権勢を持ち続けた幕府も崩壊、それには角度を変えて色々な視点より論ずべきであるが、崩壊すべき運命は如何にもする事は出来なかつたが、結果的に観れば最後は武器の優劣が決定打として浮び上がる。

その昔最新式と称された火繩銃と云うものは、先込式と云って滑空の筒の先より火薬と船玉を詰め、糊杖と云う棒で突き固める手間暇のかかる品物であったが、一、二、三番隊の編成で一番隊発射、続いて二、三番隊と発射続いた隊は直ちに火薬詰めを始め、再び号令待ちという戦法で、兎も角それなりに偉力を発揮したものの、雨でも降れば火薬が湿め

り火繩が消え、発火不能というやくざ鉄砲だ。その火繩鉄砲のまま進歩もなく幕末まで来てしまった。ただ進歩と云えば銃床に素晴らしい彫刻、銃身に金銀をちりばめ一見美事を芸術品化していたものの中身は依然火繩銃で、当時幕府は一藩の石高によって何挺と定め、軍器保持を命ぜられたと海音寺は云っている。

ところが西歐に於ては燧石銃、雷管銃と発火装置の進歩を経て一七七〇年、イギリスのロピンスによって後装連発の施條銃(ライフル)が発明され、茲に銃器の威力の強大、命中度も高く射程距離も長いという特長があったが、その最新式銃の何挺かが日本にお目見えしたのは一八四〇年、明治を遡る約三十年前の事であるが、工作上の困難は高度の精密機械を持たない手工業の日本の鉄砲鍛冶の手に負えるものでない。之は当時の外国の商人によって途方もない高値を値段を吹っかけられた。因みに種子島に於て領主の時亮が手にした二挺の火繩銃は一挺千両と伝えられているから、当時五百石取りの侍にしてやっと入手出来るかどうかと云う値段である。

ところがこのライフルを手に入れる藩として、長州には保護領対馬という密貿易の格好な島があり、又薩摩には属領琉球がこられた幕府の目の届かぬ所で両藩は逸早くこの新式ライフルを次々と手中に収めていた。幕末に於けるいくつかの戦争のあとを見れば、明かにこの武器の優劣が物を云っている。即ち伏見鳥羽の戦、第二次長州征伐、上野戦

争(彰義隊)や、武器の最も劣悪な奥羽列藩同盟軍と、最新式兵器を持つ薩長軍のライフルやアームストロング砲の敵ではない。

この旧式鉄砲は明治十年の西南の役にも重大な影響を及ぼしている。明治維新後十年まで新政府は内外多事多端、特に国内では秋月の乱、神風連の乱、萩の乱、地租改正反対の乱、徴兵反対の乱、佐賀の乱等全国的に内乱続発、最後の西南の役の如きは最も大きなものであった。因みに渡辺保、高橋真一両氏の「日本の政治」によれば、この十年間に全国に続発した内乱は四〇〇件をあげている。新政府もその鎮圧に忙殺され、新兵器の製造などは思いもよらぬ有様であった。このごたごたの時に西南の役の勃発である。

薩軍は刻々と熊本城攻撃にかからんとし、北上進撃を始め、一刻も時を許さぬ状況である。明治十年二月十三日、乃木希典少佐の率いる小倉第十四連隊に動員が下令された。茲で連隊の装備として武器という泣きどころが俄然起きて来た。新式の元込めスナイデル銃は連隊兵員の半数しか準備がなく、あとの半数は先込式のエンビルと云うどうにもならぬ旧式のもの、これで新式銃の揃った薩軍に向ったら、如何に智謀に秀でた乃木軍と雖も、戦わずして勝敗の帰趨は判然としている。電信連絡によれば政府はその新式スナイデルを船積したとあり、今日か明日か一刻千秋の思いで待っているもの、折悪く二月十二日より九州地方は暴風雪で、待てど暮らせど一

向に船は入港しない。やむなく準備済みの半数部隊を先発せしめ、後続の部隊は新式銃の着荷を待って福岡で合流せんとする方針で、その半連隊が新式銃を入手出来たのは十七日であった。

茲で又一つの難問題が起った。取換えた旧式銃を如何に格納して置くかである。当時福岡地方にも不平土族が沢山いて、この銃に目をつけ之を奪って薩軍に合流し、背後より政府軍を攻撃せんとする情報であった。そこでこの旧銃は県令渡辺清を介して、警察力をもって嚴重に保管を依頼し、全員尺余の積雪を踏み強行軍で一月十九日頃、やっと熊本城に辿りついたということである。

悲劇の將軍乃木希典が、西南の役で連隊旗を薩軍に奪われたことが、抑も乃木終生の一大恨事となつて、一生を通じて彼の脳底を去来する。(以下次号)



亡き忠臣を偲

辻 旭 城

南北朝時代の勇将哀史  
絳友石橋旭嶺君の得意曲「菊水の旗」が演奏会場に流れて、プログラムの進行は半分をすぎたことになる。

らバス約三十五分、赤坂城の東南八キロ、城は四面を溪谷に囲まれ天然の要害である。

古文書によると天王寺、阿倍野付近は、南北朝時代には兩軍の重要な争奪地で、楠正成も河内国赤坂から四天王寺に進出して激戦を交えている。また北畠顯家は親房の長男で、建武の中興では政治的手腕抜群で、功により陸奥守に任ぜられた武將であるが、その後後醍醐天皇を援けて南朝の忠臣となり、高師直軍と激戦して堺附近の石津で戦死した。

延元元年(一三三六)正成が湊川に出陣するとき、死を覚悟して撰津国三島郡島本村桜井の里に一子正行を呼び教訓して別れたが、今も「楠公訣児の処」と、「楠公訣別の処」の二碑が残っている。

生長した正行は父の遺志を継いで摂、河、泉等の各地から兵を集めてよく戦い、正平二年(一三四七)には瓜生野(遠里小野)に於て高師直軍と戦って大勝利を得、その勢いを以て四天王寺に進出、ここでも敵を紛砕し之を追撃して渡部橋畔で大打撃を与えたが、師直は莫大な軍資金を投じて将兵の増強、兵器の拡充を計ったため、戦機は一変して正行軍は河内平野を後退、四條畷の飯盛山で最後の決戦をすることにした。

飯盛山は国鉄片町線の四條畷駅下車、駅前から京阪バスで神社前で降りる。四條畷神社には楠正行、正時兄弟を始め和田賢秀らの忠臣が祭られている。飯盛山(三二八米)は四條畷神社の上にあつて、山頂には三好長慶の

千早の城跡というのほとんどな所にあつたのだろうか。その現地と忠臣の偉功を偲んでの演奏は、今後に於ける琵琶楽の発展に役立つものと思われ、少しでも参考となれば筆者の幸甚とするところである。

近鉄阿倍野橋駅から電車で富田林駅下車、駅前からバスで千早赤坂村役場前で降り、徒歩十分のところに赤坂城跡がある。

昭和三十一年、千早村と赤坂村が合併して千早赤坂村となったが、大阪府の最南端に位置し、東南に金剛葛城の連峰を望み、西南には和泉山脈が連なる山岳地帯の農山村で、中央に千早川が流れ、東より水越川、その間に足谷川、これらが合流して東条川となって北方石川に合し、遠く大和川に注いでいる。

千早城跡は千早を始め上赤坂、下赤坂にもあり、下赤坂城は千早川の懸崖に臨み、丘の端の景勝地にあつて、丘の上は拓かれて畑となつてはいるが、ここに本丸、二の丸の跡がある。

元弘元年(一三三一)楠正成が勅命によつてこの城に立籠り北條勢の大軍と戦つた。正成の死後も楠氏の本拠であつたが、天平十五年(一三六〇)廃城となつた。本丸跡には正成の記念碑が建てられている。また東方約一キロの千早赤坂村大字桐山には、上赤坂城とよばれる楠城跡がある。

城跡が残っているが、正平三年(一三三八)高師直の大軍と激戦して武運拙なく敗北し、正行を始め正時、和田一族と共に戦死した。

附近には楠公夫人を祭る御妣神社や正行、和田賢秀らの墓がある。

村上天皇は天正二十三年(一三六八)大阪住吉の行宮で崩御、次の長慶天皇はここで位を継がれた。行宮の遺址は現在正印殿社として住吉神社附近に残っている。この頃大和吉野山と諸国天野方諸勢との連絡に、伊勢大湊と共に活躍している堺の浦は住吉神社の領地で、又有名な正平版論語等の出版事業が行われ、西海の交易要地として発達してきた。室町時代には商船の出入が頻繁となり、更に経済的な発達を遂げた。

当時堺の浦に拠つた人に、山名氏清と大内義弘がある。山名氏清は堺の浦を改めて泉府と云つたが明徳の乱で亡び、又大内義弘はここに城を堅め矢倉を築いて足利氏に叛き、足利義満を大いに悩ましたが、遂に撃滅された。これが歴史に残る応永の乱である。

言 (32)

藤原定家 「新古今集」や「小倉百人一首」等の選者で絢爛の歌風を誇つた鎌倉初期の歌人。京都嵯峨や千本今出川の般舟院附近に住んで式子内親王との恋に浮き身をやつした。仁治二年没

我が道を行く  
六十五年(四一)  
西郷 天 風



それにもまして大都會の文化的な生活様式が如何にも住心地よく、見るもの聞くもの総てが若人の心を引きつけるに充分だった。

新様に仔細判明によつて安心した女将(おかみ)は、一人息子の案内に任せ、昨日は浅草、今日は銀座と、母子連れだちの東京見物は、まことに楽しく約半月を夢のように過した。其間浅草へは三回も足を運んだが、中でも刀を借り早わざに一驚を喫した事があったが、あれは沢何とか云う劇で、刀を抜いたと見れば早くも腰の鞘に収まつており、その間に相手の傘は美事に切られておる、あれが人間わざかと今だに不審がとけません、あれは確か私と同じ沢田の、何とかいゝましたか?

それは沢正劇で、沢田正二郎の事でしょう。といへば、そうそうといたく喜んで、あなた東京の人と聞いては何が何でもお世話して、仲の御恩返しをしなければ罰が当たります」といよいよ話は核心に入った。

この女将の家は温泉で知られた大綱町で、五軒程の温泉宿のうち二番と下らぬ家だったが、数年前丸焼けとなり当分焼跡の奥の方に

バラック建てで営業を続けておる、そこえ一ヶ月でも二ヶ月でも泊って俸の御恩返しをさせて下さい、といふながら、私の荷物を持って降車の準備を初めれば、程なく列車は駅に着いた。女将は「此処ですよ、大鰐ですよ」と私を促し乍ら出口に急ぐので、私も琵琶を手にしてその跡について行くしかなかった。

駅前に出れば、この女将に行交う人々が何れも先方から丁寧に挨拶を述べ有様は、まさしく此地での名門らしかった。

駅前のダラダラ坂をおりかけた頃、人力車の車をソリに付け替えた「人力ソリ」の車夫と馴れ馴れしく立話の末、私の前に棍棒をおろし、女将と共にすゝめる車夫の言葉は東京辯だった。

この「人力ソリ」に乗って二分ばかり走ったあたりから温泉街らしい通りとなり、道路の左は小石の間を流れるせゝらぎの音も淋しく、温泉町風景はこの流れを挟んで、つましげに展けていく。

「人力ソリ」は人力車より座席が低く、今思えば丁度中華民国の黄包車(カンボーツ)やベトナムのシャイタイに似て乗心地はまあまあと云うところだが、今より五十年前、即ちシャンハイや印度支那へ行つた事のない時代では、只珍しく面白い気持で、かれこれ二十分も走った頃、かなり広い空地の奥まった処にあるバラック建ての浴場へ着いた。

りて沢田の女将と行き逢った。人力ソリは女将の指図で又元の道を一、二分戻り、間口三間もあるかなり大きい日用品雑貨や果物等の店さきえ棍棒をおろし、横柄な言葉で店の者を呼びつけ乍ら奥の方へ消えた。車夫のくせに、と思ひながら行んでいると、十四五歳の小娘が現われ、いともいんぎんに私の前にたつて、陳列台のうしろを左へ行けば、渡り廊下を隔てた二階建の離家へ案内され、階下の八畳間に旅装を解いた。

<p>錦心流琵琶蘇水会 函館琵琶連盟</p> <p>高橋 蘇水</p> <p>〒040 函館市青柳町二六ノ一四 電話 (二二二) 八三六五番</p>	<p>新瀉琵琶協会長 錦心流一水会新瀉支部長</p> <p>樋口 禁水</p> <p>〒950 新潟市米山西通り一四九番地 電話 (二五二(四四)七〇九二番</p>	<p>あさひこ短歌会 翠琵琶宗家</p> <p>竹下 翠風</p> <p>〒168 東京都杉並区下高井戸五ノ二二 電話 (二一三〇三) 五八九四番</p>
--	--	---

度は呑みたくないので、其時は必ず車を引出す。すると家族はそれとばかり数々の馳走を用意して待つのが例で、今日は其日だった。それで女将はわざわざ一本持参で来た次第だからお客様も附合せて下さいよ」と云う。下戸の私もそれでは断る言葉もなかった。

翌日は此処に来て二日目ながら、話相手とて無く、無聊のあまり映画でも楽しもうと聞けば、この町には映画館も劇場もなく、汽車で一と駅歩いて先の弘前市へ行くとのこと、映画見物に汽車で通うなど中々乙なものばかり早速実行を試み、帰ったのが十一時を過ぎていた。それは正月でも寒いほうの夜だったが、私の部屋には寝床は敷いて、枕元に酔ざめの水は用意してあれど、火もなければ湯茶もない。それは、男ざかりの旅先であれば遊里通いとみたのであろう。

### 大阪夏の陣(三)

山川流水



いよいよ関東勢の大阪攻撃である。元和元年四月二十五日、徳川秀忠集団軍の先手として藤堂和泉守高虎が京都・淀を進発した。小野清の「大阪城誌」によると、その後、藤堂部隊の目的が河内砂(現在の四

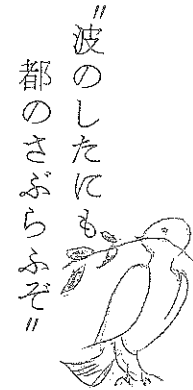
條原市大字砂)である、とスパイ情報で知った大阪城の大野治房は、これを迎え撃つため二十五日夜砂に到着した。ところが藤堂部隊は淀川沿いに南下してきたが、枚方に布陣して砂に姿を見せない。しかも井伊掃部頭直孝も増強して来るという。このため大野治房は作戦を変更、生駒山を越えて大和郡山を攻撃することとし、一万二千の兵を率いて紀州征伐に繰出した。米田監物、岡部大学、塙団右衛門らを先手の大将として、泉州から攻めこんで和歌山まで乗取ろうという作戦である。

井隼人正、家康に五千石で取立てられた郡山の城代である。大阪の戦が起こったときに家康から郡山城代を命じられ、将来は大名の約束で、名利法隆寺守護を堅く下命された。そこへ大阪方が法隆寺進攻の知らせがあったので、ここぞとばかり張り切つて五百の軍勢を率いて迎撃した。塙右衛門は三百の同勢で、斥候を放ちながら郡山の様子を見ていたが、隼人正が人数を連れて城を出たことが判つたので、「それッ」とばかりに郡山城へ押しかける。真先きに力量抜群の家来坂田庄三郎が二十人ほどの選抜いた勇士を引連れ、筒井の紋所、笠じるしをつけてバラバラと駆け出した。

でも、抜けの殻、火をかけて大阪方は引揚げたが、これで名刹法隆寺は焼失を免れた。

「大阪軍記」や「真田三代記」では、大阪方の郡山城襲撃で塙右衛門や坂田庄三郎の豪傑振りを語っているが、「大日本史料」「大和郡山史」などには、この二人の名前は出ていない。大野主馬と大和出身の浪人が主役になっている。

(以下次号)



波のしたにも  
都のさぶらふぞ

平家物語から

津田 さち子

文治元年(一一八五)三月、源氏に追われた平家一門は西海の壇の浦に武運尽きた。もはやこれまでと、故清盛の妻二位尼は孫の安德天皇を抱き、波の下にも都がございませと小さな耳にささやいて海底深く沈んでいった。波の下に都は何とあわれで甘美な言葉であろう。私は平家納経の華麗きわまりない世界を思い浮かべる。二十一年前の長寛二年、平清盛が一門の栄達を謝し、来世の果報を信じて、観世音菩薩の化現敷島大明神に奉納した三十三巻の善美をつくした経巻の耽美世界も、平家一門がもろとも沈んでゆく哀絶さも、いづれもが甘美な一環である。

平家一門には待む世界があったのではない。この世で栄華の限りをつくしたものが未来の果報を願うあまり、むなししい幻影を抱いたのではあるまいか。しよせんは武門でありながら、この世界の決着を武器でつける強靱な精神を忘れた。政略の根を宮廷に張った藤原貴族に似ても似つかぬもろさをはらんだ貴人たちであった。南無観世音菩薩と唱える尼の目は、波の下に都をみただのかも知れぬ。金銀の箔を海面にちりばめたように、幻想的な尼の言葉である。

新作  
琵琶法師蟬丸

柿沢篁峰作



今は昔 村上天皇の殿上人 源の博雅卿は楽才秀でし人なれば 如何にもして逢坂の関の盲人 蟬丸法師が弾でつる 妙なる琵琶の音聞かましと 人をして蟬丸に今一度 都に帰りに琵琶の道 世に伝えよと申せしが 世の中はともかくてもすごしてむ 宮もわらやも はてしなれば と答えて応じざれば 博雅卿は自ら逢坂の関に赴き 蟬丸が秘曲流泉啄木を聞かんものと庵を訪ねて足かけ二年 遂に八月十五日仲秋の名月 風情の深き夕なれば 蟬丸は書條に

出でたん座して 夜空を仰ぎ名月を愛で 弾く手いともあざやかに 逢坂の関の風の激しきに しいてぞ居たる 世をすこすとして と歌いけり しばし我を忘れて博雅卿 妙なる調べに胸打たれ思うよう かつては式部卿の雑色としてありし頃 共に歌い弾ぜしが 今日盲人の身となりて 一人逢坂にわび住居うき世を忍ぶ哀れさよ 蟬丸そぞろに思うよう 世にも稀なる名月の夜なれば 誰か訪づれ芸の道 共に語りて明かしたきものぞと 一人わびしくつぶやけり 折しも折り博雅やにわに踊り出で 都に住む博雅これにあり好める芸道を求めて 雨にも負けず風をもいとわず 庵を訪ねて通いけり 今宵奇しくもまみえしは これ今生の生き甲斐なり 乞い願わくば流泉啄木の秘曲を あまねく伝授願わしう存ずると平身低頭 三拜九拜 されば 蟬丸も本意ぞと 胸踊らせて弾じけり 大絃嘈々として村雨の如く 小絃切々として私語に似たり 大絃と小絃と錯雑に弾けば 大珠小珠玉盤に落つ その夜明け方 あまねく秘曲を身におさめ博雅卿は懇ろに 蟬丸法師を伴いて 勇みて都に帰らるる 祇園精舎の鐘の聲 諸行無情の響あり 盲僧琵琶の妙音は 京の都のおちこちに 秘曲を奏で切々と 余韻を流し弾ずれば 都大路の人々は 心を打たれて立ち止まる 心打たれて立ち止まる」

武絃会。一水会多摩支部合同研修会  
七月四日(日)屋小金井市福祉会館。花吹雪・篠宮操水 戦艦大和・落合白水 高松城・小山羽水 西郷隆盛・伊藤整水 城山・石井效水 別れの盃・小川吐水 伊豆の御難・中村修水 本能寺・押谷君水 義士討入・村木桜柳 修善寺物語・杉山旗水 俊寛・伊集院 鼓城 同(下)坂本錦道。以上演奏のあと乾盃散会した。

大阪琵琶同好会の納涼大会  
毎年七、八月は琵琶をはじめ各芸道は夏枯れと云われるが、この夏枯れを吹き飛ばそうと七月十日(土)屋奈良簡易保険保護センターの舞台付大広間で琵琶を主体とする納涼諸芸大会を催した。折から奈良県郡山市婦人会の総会がこの会場で開かれ百余人の女性が参集して会場のあつと我々の催しに盛んな声援を送り終日賑わった。白虎隊・島津教室社中 大物の浦・水谷旭甫 吉野落・作花旭秋 由比ヶ浜・辻旭城 柳の精・石橋旭嶺。外に詩吟、剣舞、短歌朗詠、居合道など数題。

鶴彦会の研修会  
七月十一日(日)昼浜松市積志農業会館。王昭君・川口ひさえ 七脚落・松木美代子 小松の操・高林愛子 春の調・竹原香風 児島高德・大石晃月 小松の操・伊藤鶴麗 寂光院・染谷鶴泉 城山・三上鶴浄 巴御前・柿沢篁峰 九連城・小野鶴彦。以上演奏五時

閉会した。当日は集中豪雨のため数名の欠席者があり些か淋しかった。

柴田富山氏の「ねぶた音頭」  
青森市の津軽琵琶宗家柴田富山氏作「ねぶた音頭」芋鍋へねぶたばやしを箏撥に母笑わせき團火裡のはたに」が七月十一日(日)昼十一時NHKテレビで伊沢八郎歌手により放映され、席上柴田氏が画面で琵琶を抱いて撥で二、三音を出し琵琶PRにも効果を挙げた。

「山崎旭幸の琵琶」特別公演  
(京絃八月号朝日新聞から転載報道)。七月十三日(木)夕六時半大阪新町更生年金会館中ホール、民主音楽協会主催(一八〇〇円)。芸術選奨文部大臣賞受賞の榮譽に輝く山崎旭幸女史が笛の藤舎推峰、鼓の藤舎呂弘両氏協賛のもとに主記が公開され①大楠公一旭幸・推峰、②重衡一絃旭幸、菊地旭蘭、矢吹旭美津・歌佐藤旭天紅、押川旭葉、田子旭園、板谷旭邑・笛推峰・鼓呂弘、③現代琵琶曲白鷺と若者一作と演出谷村陽介・作曲旭幸、推峰。琵琶旭幸とその一門・笛推峰、④安宅一旭幸の四曲が特別公演されたが、その内の③は日本初演で白鷺と若者の永遠の愛を現代語化した。

琵琶数氏と笛合奏の新規軸で演出したものと注目され、流石の大会場も満員の盛況を呈し成功をおさめた。

日本芸術琵琶協会七月例会  
七月十八日(日)昼東京西新宿七丁目柏ビル六階で開催。門琵琶・伴流能勢西田風第五、六弾連弾・錦幽 川中島・青木草水 白虎隊・原島晴洲 滝口入道・山崎錦幽 須磨の敦盛 若宮旭登 本能寺・長谷川錦舟 湖水乗切 石田脩水 平家物語朗読・雨宮映月。以上研修の後小宴を開き七時散会した。欠席者杉山旗水、高田瑩水両氏。尚八月は暑中休会とする事になった。

祇園八坂神社奉納演奏会  
千年の伝統を持つ京都祇園祭りは日本三大祭の随一として名高く毎年七月一日の八坂神社に於ける吉符(きつぷ)の儀式に始まり十七日の総勢二十九基の山鉾巡行を頂点に、二十四日の遷幸祭、二十九日の奉告祭まで約一ヶ月に亘って京の巷は祭り気分が酔いしれる。京都琵琶協会では過去二十数年間毎年欠かさず遷幸祭の前夜祭(二十三日)夕刻から八坂神社能楽殿に於て奉納演奏会を奉仕し、本年も梅雨明けの同夕盛大に開催したが、演奏会場前にしつらえた天幕張りの腰掛に数十人の善男善女が静聴して各流派琵琶の醍醐味に浸っていた。